

市では、現在新たなまちづくりの指針となる新総合計画の策定を進めています。計画を審議する総合計画審議会の委員の皆さんに、これからのまちづくりに期待することなどを伺います。



仙台農業協同組合青年部  
委員長  
笹野 良輔 さん

### プロフィール

平成27年に仙台農業協同組合を退職し、農業を営む実家の跡を継いで本格就農。令和2年3月、仙台農業協同組合青年部委員長に就任。生産者として農業を楽しみつつ、仙台の食農の課題解決に取り組む

**Q** 仙台の食農の振興に向け大切にしたい視点は？

**A** 新総合計画の基本計画中間案には、取り組むべき施策の一つとして「農林業の推進」が挙げられています。これに向けて仙台農業協同組合（JA仙台）青年部が重視しているのは、生産者と消費者の接点を増やすこと。そのため力を入れているのが、宮城県内のJA青年部が合同で企画運営している農産物直売イベント「農魂祭」です。勾当台公園市民広場を会場に、これまでは年に1回のペースで開催（本年度は中止）。採れたての野菜や地場産品の販売、飲食ブースの出店などを通して、消費者の皆さんや飲食店の方々に仙台宮城の農産物をアピールしています。生産者が売り場に立ち、農

産物の魅力や栽培のこだわりなどを直接お伝えできるのが、このイベントの大きなメリット。新型コロナウイルス感染症が落ち着き、また再開できるようになれば、こうした接点や交流の場を積極的に設け、地産地消の推進や農業の収益性向上につなげていきたいと考えています。

**Q** 生産者側から見た仙台の農業の課題は？

**A** たとえば伝統野菜である「仙台曲がりねぎ」は、あえて曲げる手間を加えることでおいしさが生まれます。そのため植え替え作業は、暑い夏の時期。高齢化が進む生産者にとっては、体力的に負担の大きい野菜です。この先も栽培を続けるためには若い力も必要でしょうし、新たな担い手も求められるようになるでしょう。仙台の農業を受け継いでいく人を、育てていく必要があると感じています。



▲「農魂祭」では、仙台・宮城の農産物の魅力を、生産者からじかに知ることができます

## 伝統野菜と新ブランド野菜

皆さんは、「からとり芋」と呼ばれるサトイモと、「仙合金時」というサツマイモをご存じですか？「からとり芋」は、「ずいき」や「あかから」などと呼ばれるサトイモの葉柄をとった、仙台の伝統野菜の一つです。「仙合金時」は、東日本大震災の後、塩害にも強い作物を育てようとした農家の皆さんが、徳島県の有名なブランドである「鳴門金時」の苗を植えて育てた、仙台のサツマイモの新しいブランドです。

政令指定都市における本市の消費量は、サトイモは6番目、そしてサツマイモは最多となっています。秋の風物詩「仙台芋煮」でサトイモが使われること、新しい品種が開発されたことなどが消費量の多さに関係しているのかもしれませんが。今後も、農産物の高付加価値化や地産地消推進サポーターの養成など、地産地消の社会づくりに向けた取り組みを進めていきます。



▲からとり芋。葉柄は赤色で正月料理などに用いられる

こうした時代の流れの中で、JA仙台青年部では「全国的に強くアピールできるような仙台の新しい特産品をつくりたい」という声も上がっています。これまでも生産者個人で新しい作物に挑戦している方もいますが、もっと地域一体となつて取り組むことができれば、仙台の農業を盛り上げていけるのではないかと期待しています。

**Q** 今後のまちづくりに期待することは？

**A** 100万都市である仙台は、農地・住宅地・商業地が融合したまち。消費者との距離が近い都市型農業は、生産者もやりがいを感じやすい上、食農ビジネスの推進においても大きな強みだと

思います。

さらに、この恵まれた環境を子どもたちの食育にも活用できれば、新たな基本計画で仙台市が目指す都市の姿の一つである「学びと実践の機会があふれるまち」にもつながります。学校や地域と連携しながら収穫体験を行うなど、子どもたちと農家との触れ合いを増やすことで、農業の魅力や食の大切さを伝えたいと願っています。

またJA仙台青年部では今年、新型コロナウイルス感染症の影響で困窮する留学生へ食糧支援を行うことにより、食べ物に命を直結するものと改めて実感しました。この学びもしっかりと未来へ生かしていきたいです。